



地方独立行政法人
北海道立総合研究機構

平成27年度 水産研究本部成果発表会 のご案内

当本部が取り組んでいる研究開発や研究成果を広く皆様に公開し、ご活用いただくため次の通り『水産研究本部成果発表会』を開催いたします。多くの皆様にご来場いただきたくご案内申し上げます。



●日時 平成27年8月4日（火）
10:00～16:40（9:30受け付け開始）

●会場 第二水産ビル8階 会議室
札幌市中央区北3条西7丁目 TEL：011-281-2071

* 駐車場はご用意していませんので、公共交通機関をご利用願います。

●プログラム

10:00～10:10	開会挨拶	
10:10～11:40	□頭発表	
11:40～13:30	ポスター発表	第1部
13:30～15:40	□頭発表	
15:50～16:40	ポスター発表	第2部

参加
無料

時間	発表課題名	発表者	発表概要
1 10:10 ～ 10:25	ホッケの誕生日を調べる！ －扁平石を用いた耳石輪紋の日周性の確認－	稚内水産試験場 研究職員 鈴木 祐太郎	近年加入量の減少により資源量が急減しているホッケ道北系群について、有効な資源管理を実施する上では新規加入量の早期把握が必要である。本系群は孵化後1年弱で漁獲加入するため、生活史初期（仔稚魚期）の減耗要因の解明が急がれている。そこで、ホッケの初期生残に影響すると考えられる孵化日を推定するため、飼育実験により耳石日周輪の形成を確認し、さらに野外で採集された仔稚魚の耳石輪紋を観察して孵化日を推定した。
2 10:25 ～ 10:40	光センサーでホッケの脂の乗りをみる！ －ホッケ一夜干しの選別技術の開発と食味試験－	網走水産試験場 主査 宮崎 亜希子	ホッケの一夜干しは脂の乗りが重要視されているが、時期や大きさだけでは判断できない。このため、果物の糖度のように光センサーを利用した脂の乗りによる選別技術を検討した。その結果、ホッケ一夜干しの脂の乗りは光センサーで選別可能であった。また、食味試験から脂の乗りを重要視する人の多くは、脂の多少を識別していた。したがって、光センサーによる選別技術は、ホッケの品質保証の1つとして有効であると考えられた。
3 10:40 ～ 10:55	コップ一杯の水が語る海のすがた －2013年春季北海道日本海～オホーツク海沿岸における「ヌタ」原因生物（大型珪藻コスキノディスクス）の出現－	中央水産試験場 主査 嶋田 宏	例年3～4月に植物プランクトンが増殖する「春季ブルーム」は、生物生産を支える重要なイベントであるため、2013年2月下旬以降、中央水試前浜において海水試料の顕微鏡観察を試みた。春季ブルームは例年、中小型珪藻を主体として発生するが、2013年の日本海沿岸では直径0.2～0.6mmの大型珪藻コスキノディスクスのみがブルームを形成して刺網等の漁具の汚損、オホーツク海沿岸では地まきホタテガイの貝柱歩留まり向上をもたらしたことが分かった。
4 10:55 ～ 11:10	黄金色に輝く乾貝柱の高品質化を目指して －乾貝柱の砕け・亀裂防止に関する研究－	網走水産試験場 研究職員 清水 茂雅	ホタテガイから製造される乾貝柱は、中国産製品との競合等により一層の品質向上が望まれている。乾貝柱の品質低下要因の1つである砕け・亀裂について、原料性状と製造工程の影響を検討した。原料性状では、原料の漁獲水深が深いほど工程中の砕け発生率が高くなる傾向がみられた。製造工程では、一番煮熟後の冷却でむき身品温を低くすることにより、貝柱の強度を維持することができ、貝柱を取り出す工程での亀裂防止に有効だった。
5 11:10 ～ 11:25	身近に潜む謎の生物ヒトデの生態を追う！ －飼育実験と野外調査から地まきホタテガイ漁業海域におけるヒトデの行動生態を解明する－	網走水産試験場 研究職員 三好 晃治	近年、道東の地まきホタテガイ漁業海域では食害生物であるヒトデの密度増加が深刻な問題となっている。網走水試では、ヒトデの漁場への侵入・捕食によるホタテガイの減耗対策、そして駆除活動の効率化を目指して、様々な試験研究を進めている。今回は超音波テレメトリー手法を利用したヒトデの漁場内における行動と、飼育実験から明らかになったホタテガイに対する捕食実態など最新の研究成果を報告する。
6 11:25 ～ 11:40	ヤマトシジミは冬に減耗する －網走湖における結氷時期の湖水調査とヤマトシジミの生存試験－	さけます・内水面水産試験場 研究主幹 畑山 誠	汽水湖である網走湖は北海道有数のヤマトシジミ（シジミ）の産地である。結氷時期の氷下の湖水調査とシジミの室内での生存試験を行い、冬季の減耗要因を検討した。浅い水深帯の塩分濃度は春～秋に比べ結氷期に大きく低下し、また、生存試験では海水の1/3程度の塩分濃度が最も死亡率が低く、これより塩分濃度が下がるほど死亡率は上昇したことから、浅い水深帯のシジミは塩分濃度の低下により冬期に減耗する可能性が考えられた。

口頭発表

時間	発表課題名	発表者	発表概要
7 13:30 ～ 13:45	道東海域および噴火湾での新たな養殖漁業創出の試み ーアカボヤの垂下式養殖漁業を目指してー	栽培水産試験場 部長 佐々木 正義	アカボヤは北海道の特産種であり、オホーツク海南西部から釧路までの海域と噴火湾では、その垂下式養殖に関心を示す漁業者が増えている。産卵時期や卵発生から稚ボヤまでの適正飼育条件を明らかにし、生産者が取り組める簡易的な人工採苗技術や種苗から稚ボヤに育成する技術を開発した。さらに、稚ボヤから出荷サイズまでの垂下式養殖の小規模試験を行い、新たなアカボヤ養殖漁業の事業化の可能性を得ることができた。
8 13:45 ～ 14:00	道東のナマコはいつ採卵できる？ ー道東海域におけるマナマコ繁殖生態調査ー	釧路水産試験場 研究主任 近田 靖子	道東海域では、マナマコの繁殖に関する生態に不明な点が多く残されており、道北日本海や噴火湾で行われているような採卵適期の推定ができない。そのため、種苗生産をするにあたり、成熟調査など多くの労力が必要となっている。そこで、卵の成長と水温の関係、採卵が可能な時期や孕卵数について基礎的な調査を行い、道東海域に適した採卵時期の推定方法を検討したので紹介する。
9 14:00 ～ 14:15	岩内海洋深層水で美味しいウニをなが～く味わう！ ー給餌型ウニ低温蓄養システムの開発ー	中央水産試験場 研究主幹 奥村 裕弥	磯焼け地帯の身入りの悪いキタムラサキウニ（空ウニ）に十分餌を与え、適度な低温飼育で成熟抑制することで、禁漁期（10月）に旬の品質を保持したウニを生産する技術を開発した。岩内町の海洋深層水の活用で冷却コストを抑え、旬と変わらない美味しいウニ1000個体を10月に出荷できた。サンプル出荷したウニは北陸地方で販売され、購入者から高い評価を得た。「岩内深層水ウニ」として地域のブランド化が狙える品質である。
10 14:15 ～ 14:30	変化する北海道のサケ ー来遊資源のモニタリングから見えるものー	さけます・内水面水産試験場 研究主幹 隼野 寛史	北海道へのサケの来遊数は2000年代前半まで高水準で推移したが、2008年以降は減少傾向を示している。この間、海域間での来遊数の差が拡大し、2012年には全道的に魚体が小型化、2014年には道東の4年魚だけが著しく減少、回帰年齢の高齢化など、特徴ある年が続いている。サケ資源は、沿岸および沖合の環境変動の影響を受けることが知られており、持続的に管理するためには今後もモニタリングの継続が重要と言える。
11 14:30 ～ 14:45	食われにくいサケ稚魚を育てるために ーサケ稚魚の種苗性としての遊泳力と被食回避ー	さけます・内水面水産試験場 主査 虎尾 充	北海道のサケ資源は放流事業によって支えられているが、放流した稚魚の河川内での被食は減耗要因の1つとなっている。本研究では、映像解析による遊泳速度測定法を開発し、放流後の栄養状態の低下を想定した絶食条件下では稚魚の遊泳力が低下すること、遊泳力の低い方が被食されやすい傾向があることを実験的に明らかにした。また、魚油添加餌料の給餌は絶食に伴う遊泳力の低下を軽減し、被食を低減することが示唆された。
12 14:45 ～ 15:00	どうして外来サケ科魚類のブラウントラウトを駆除するの？ ー外来サケ科魚類の管理手法検討のための生態調査ー	さけます・内水面水産試験場 主任研究員 工藤 智	ブラウントラウトの生態調査の結果、在来魚やサケ放流稚魚の捕食と近縁種の交雑など、在来の生態系やさけます増殖事業への影響が大きいことがわかった。北海道には多くの河川や湖沼にブラウントラウトが生息しており、その管理対策をさらに進める必要がある。ここでは、モデル河川での長期試験から、駆除によりブラウントラウトが減少し、在来種群が回復して増加した結果を示し、管理手法のひとつとして提案する。

口頭発表

時間	発表課題名	発表者	発表概要
13 15:10 ～ 15:25	生活史を通じたシシャモの飼育に初めて成功しました。 ーシシャモ飼育の成功と飼育実験の果たす役割ー	栽培水産試験場 主査 石田 良太郎	シシャモは、希少生物であると同時に、極めて知名度の高い地域特産品としての側面を持つ。しかし、生態情報が著しく不足しており、持続的な資源利用を考えるうえで問題点の一つとなっている。栽培水試を中心とする共同研究により、シシャモを成魚まで飼育することに初めて成功した。このことにより、野外調査では明らかに出来なかった本種の生態が、環境を自由に操作出来る飼育実験を通じて明らかにされる可能性が開かれた。
14 15:25 ～ 15:40	知っていますか？ 北海道にはニシンの「群れ」が、いくついるのか ー北海道周辺に分布するニシンの遺伝情報を利用した集団構造解析技術開発ー	釧路水産試験場 主任研究員 堀井 貴司	北海道沿岸で漁獲されるニシンは、明治～昭和30年に最高で97万トンの漁獲量を誇った北海道サハリン系群や、近年日本海での漁獲が増えている石狩湾系群など、複数の系群で構成されていると考えられている。しかし、資源管理や栽培漁業の推進に重要な各系群の分布については不明な点が多く残されている。そこで、本研究では遺伝情報を利用した解析を行い、北海道沿岸における各系群の分布に関して貴重な知見が得られた。

ポスター発表 1部 11:40～13:30 2部 15:50～16:40

- ✓ 全ての口頭発表者が、ポスターでも詳しく研究成果を説明します。
- ✓ 研究員と1対1の交流です。ご意見・ご質問に対して丁寧に対応します。
- ✓ 口頭発表を聞き逃しても、ポスター発表で説明を聞くことができます。
- ✓ お忙しい方には、短い時間で研究成果を知るために、関心のある口頭発表とポスター発表を組み合わせる参加方法をお勧めします。



●お申込方法

- 電子メールあるいはFAXにてお申込下さい。
- 電子メールによるお申込は、所属・企業、職・氏名、住所、電話番号、メールアドレスを記載し、次のアドレスに送信して下さい。
なお、申込用紙はホームページからもダウンロードできます。

●お問い合わせ・お申し込み先

水産研究本部企画調整部企画課

TEL: 0135-23-8705

FAX: 0135-23-8720

E-mail: sasaki-noriko@hro.or.jp

お申込締切日
7月31日(金)